

三輪山神婚譚と中国の王朝始祖譚

千野明日香

- 1はじめに
- 2宋太祖出自譚の構成
- 3ののしりの出自譚
- 4結び
- 5注
- 6現代の昔話資料に見える類話

「蛇婿入・苧環型」昔話の源流については、すでに多くの研究がなされてきた。先行研究については、福田晃の紹介があるので、以下に引用させていただく。⁽¹⁾ 福田は「この説話は、はやく『古事記』中巻・崇神記の意富多多泥古の条をはじめ、『平家物語』巻八の緒環、越後・五十嵐家伝、上州・沼田家伝、沖縄宮古・中宗根家伝等々、それぞれの始祖英雄の誕生伝説として叙述されるものであるが、その源流は、およそ中国大陆の王朝始祖譚に認められる。それ

は、鳥居竜藏・高木敏雄・今西竜・松本信広・沢田瑞穂・松前健・大林太良・崔仁鶴などの諸氏の踏査研究によるものであるが、朝鮮半島にあっては『三国遺事』巻二の後百濟王朝始祖の甄萱出生譚なる蚯蚓婿入りが著名であり、民間にも「夜來者譚」として高麗の崔沖、新羅の崔致遠、あるいは李朝の李成桂などの出自譚となつており、中国にあっては、宋朝の太祖趙匡胤の出自譚なる類婿入が江蘇・浙江・湖南・廣東の各省に伝承されており、朝鮮北部の咸鏡北道方面では、同じ類婿入りが旧滿州朝の始祖譚（＝清朝太祖ヌルハチ出自譚——引用者）となつており、ベトナム方面では、丁王朝の始祖丁先皇のそれと伝えられている。当然、わが国の苧環型蛇婿入譚の源流は、中国大陆に求められることになる」と要約している。

この福田の——蛇婿入・苧環型昔話の源流は中国大陆の王朝始祖譚に求められる——という仮説が、ひとまず現在までの研究の到達点といえるだろう。しかし、中国についての研究はまだ乏しく、福田の言う「宋朝の太祖趙匡胤の出自譚なる類婿入」についても、鍾敬文の先駆的な研究⁽²⁾があるだけで、『古事記』・崇神記中巻の、いわ

ゆる三輪山神婚譚をはじめとする「蛇婿入・芋環型」昔話などどのような関係にあるのかは、定かではない。

そこで、この稿では、宋朝太祖趙匡胤の出自譚をとりあげ、①宋朝太祖趙匡胤出自譚（以下、宋太祖出自譚と简称）は、三輪山神婚譚の源流か②宋太祖出自譚と清朝太祖ヌルハチ出自譚（以下、清太祖出自譚と简称）は王朝始祖譚としての聖性を持つか③朝鮮の甄萱出自譚と三輪山神婚譚は王朝始祖譚として同質か、といった点を中心に探つてみたい。

2 宋太祖出自譚の構成

宋太祖出自譚は、異類と人間の間に生まれた子どもが良い風水を得て宋朝太祖趙匡胤になる、あるいは、その子孫から趙匡胤が出るという話である。詳細は、論文末に添付した類話【17】から【27】を参照していただきたい。

中国には、殷周の感生伝説をはじめとする古代の帝王の異常出生譚が数多く見られる。こういった出生譚では、日月や星辰、種々の光、気、天や天女、神や神人、竜、鳳などが人間と関わりを持ち、その結果産まれた子供が王権を掌握する。これらは伝統的な王朝始祖譚であり、子孫は当然のことながら聖性を持つ。

一方、三輪山神婚譚は、「蛇婿入・芋環型」昔話の日本における最古の類話であり、蛇神の子孫は聖性を持ち、蛇神の血筋を家門の誇りとする。大林太良は、「三輪山型伝説も、その発達のある段階

ではオホタタネコがある王朝の始祖だという王権起源神話だった可能性もありうることを考えさせる。そして、朝鮮の甄萱の話は、事実、王朝起源神話なのであって、この推測を強化する材料になつてゐる」と述べ、三輪山神婚譚と甄萱出自譚の、王権起源神話としての共通性を指摘した。⁽⁴⁾

宋太祖出自譚でも、異類と人間の娘の間に子どもが生まれ、その子が皇帝になつたり、皇帝の先祖になつたりして崇められる。両者の主人公は、いずれも結末で尊崇の対象となる。三輪山神婚譚の源流を、朝鮮半島を経由しつつも、最終的に中国に求めるなら、その対象として宋太祖出自譚が仮定されるのは、自然なりゆきであろう。

しかし、異類の子どもがなぜ尊崇されるにいたるか、という道筋を考えてゆくと、宋太祖出自譚と三輪山神婚譚とは性質が異なると考えざるをえない。

三輪山神婚譚では、蛇神の流れを汲む血筋そのものが尊崇の対象になる。しかし、宋太祖出自譚では、異類の血筋は嫌惡の対象でしかない。この点は、宋太祖出自譚の構成から見てとることができる。

宋太祖出自譚は、もともと単独で伝承されていた二つのタイプが複合したと考えられる。この点については、すでに鍾敬文の指摘がある。⁽⁵⁾それに従えば、娘のもとへ通つた異類が殺されるまでが前半で、ここまででは「蛇婿入・芋環型」に対応する。（類話【1】から【13】を参照。ただし、糸を通した針を通つてくる男の服に付けて行方をさぐるモチーフは、必ずしもすべての類話に現れるわけでは

ない)

後半では、異類の息子が、皇帝あるいは皇帝の先祖になるが、この部分はかつてエーバーハルトが「充分に生かされた風水」型と名付けた単独のタイプである。(類話【14】から【16】を参照)エー バーハルトは、このタイプを「1、ある風水の良い地点が、墓として決定される。2、不誠実な者の子孫は皇帝、あるいは大臣になる。3、正当な者の子孫は大臣、あるいは有名人になる」と要約している。

前半の「蛇媚入・芋環型」に対応する、他の類話を見ると、異類の男はすべて殺される。殺されることは、異類が神性を持つどころか、厭わしい存在として排除されたことを示す。宋太祖出自譚の異類の運命は、これらの類話の異類たちと同質と見て良い。この点に関しては、以下のような異論が出されるかもしれない。

神は、時代が下れば妖怪に零落する。ここに挙げられた類話は現代の資料だから、異類に聖性が見られないのは当然のことではないか、というものである。しかし、これは必ずしも当たらない。

中国において、三輪山神婚譚や「蛇媚入・芋環型」に対応する最古の類話は、唐代『宣室志』(九世紀)に見える平陽(湖南省)の人、張景の娘の話とされている。ただ、個々のモチーフを見ると、「宣室志」より古い時代にさかのぼる。

一例を挙げれば、類話【4】【5】に、「姓は虯、名は鰐」と異類が正体をもじつた名前を名乗るモチーフがある。このモチーフは、『宣室志』では、夜、白い服の男が現れて「齊の人、曹氏の子」と

名乗る形で現れる。これは蟾蜍(ネキリムシ)の名前をもじつてい る。ところが、このモチーフは、『宣室志』よりさらに古い南北朝 梁から陳にかけて成立したと推定される『統異記』(六世紀)にも 見える。『統異記』では、零陵(湖南省)の農民のもとに夜、黄色い服の男がたずねてきて「姓は廬(リ)、名は鉤(gou)」と名乗る。この男の正体は蠍蛄(オケラ・lougu)であり、廬鉤の正体が蠍蛄と気づいた農民に、畑で熱湯をかけられて殺される。つまり、南北朝に遡っても、異類はやはり嫌惡の対象として殺されているのである。

今このところ中国、日本、朝鮮、ベトナムを通じて「蛇媚入・芋環型」に対応する最も古い類話は、『古事記』(八世紀)の三輪山神婚譚とされるが、中国には本当にこれより古い類話が存在しないのかどうか、今後の研究が待たれる。

ところで、宋太祖出自譚の結末で、排除された異類の子どもが出生するのはなぜか。それは、偶然に良い風水を他人から奪うことができたからであって、血筋によるのではない。宋太祖出自譚の後半をなす「充分に生かされた風水」は風水の良し悪しが運命を決める主要な要素になつていいから、当然、風水説が確立した後の産物である。風水説は、三世紀に管輅および郭璞によって体系化され、七世紀にはあらゆる階層に浸透したという。「充分に生かされた風水」は『異苑』(五世紀)⁽⁸⁾に初期の類話が見えるので、南北朝時代には伝承されていたといえる。

現在伝承される「充分に生かされた風水」には、平凡な牛飼いが

状元に出世する類話【16】がある。また、類話【14】でも、主人公の趙匡胤は普通の牛飼いであって、異類の子どもではない。

「充分に生かされた風水」は朝鮮半島でも伝承がある。対応するのは「33嫁に行つた娘は他人（崔仁鶴）⁽⁹⁾」である。嫁に行つた娘が、父が亡くなつたので葬儀のために実家に戻る。そして、風水師がみつけた風水の良い地点を巧知によつて横取りし、舅の遺骨を埋める。その後、娘の嫁ぎ先は栄えたという話である。風水さえ良ければ出世は可能なのだから、このタイプでは主人公に特別の能力はいらな

い。牛飼いは社会的な身分としては低く、社会的には弱者である。また、嫁に行つた娘は、実家にとつてすでに他家の人のので、実家から排除された存在である。宋太祖出自譚に現れる異類の息子に特別な聖性が無いのは、彼らと同じ、社会的な弱者であるという性質しか持たないからであろう。

尊崇にいたる道筋の違いから見て、宋朝太祖出自譚は三輪山神婚譚とは異質であり、神婚譚のような聖性は見られない。

こうしてみると、宋太祖出自譚と直接の伝播関係があると考えられるのは、宋太祖出自譚と同じ構成を持つ朝鮮北部の清太祖出自譚とベトナムの丁部領出自譚である。この二つの出自譚は、皇帝の出自を説明しているが、宋太祖出自譚と同じように、両話とも異類は殺されて終わり、異類の出自そのものは聖性は見られない。

上記の考察に沿つて各国の類話を整理すると上図のようになる。

タイプ名は、便宜的に上記で用いたものを用いる。

3 ののしりの出自譚

ナム ベト	中国	朝鮮	日本
不明	*伝承はあるが、 タイプとは認識され ていない	*「夜來者型」 『瓢箪出自譚』 *多數の伝承あり	「蛇媚入・芋環型」 『蛇媚入・芋環型』 『三輪山神婚譚』 *多數の伝承あり
不明	「充分に生かされた風水」 *多數の伝承あり	「嫁に行つた娘は他人」 『清太祖出自譚』 *多數の伝承あり	「充分に生かされた風水」 『宋太祖出自譚』 *多數の伝承があり 可能性あり
〔丁部領出自譚〕			

宋太祖出自譚の興味は、いつたん定まつた風水がいかに人を支配するかという点にあり、その背景には中国で人気のある『楊家将演義』の浸透が伺える。⁽¹⁰⁾

楊一族の物語は、北宋以来、民衆の間で人気を博し、明代には『楊家將演義』として小説化された。楊家は趙家に並はずれた忠勤を励む。しかし、楊家はなぜ忠勤を励まねばならないのか。この疑

問について、楊家の運命は趙家に風水を横取りされた時に定まつた、と半ばユーモラスに解き明かすことが宋太祖出自譚の眼目と思われる。

ところで、前節で整理したように、宋太祖出自譚の類話には、朝鮮の清太祖出自譚がある。この清太祖出自譚はどのような性質を持つのか。

清太祖出自譚は朝鮮の北部、咸鏡北道方面に流傳する。⁽¹⁾ 宋太祖出自譚が、中國に国境を接する咸鏡北道方面に伝わつたとみられる。しかし、よく考えてみると、なぜ中國の皇帝である清太祖の出自譚が朝鮮に流傳するのか。宋太祖出自譚は、なぜ朝鮮に入ると清太祖へと主役を入れ替えるのか。

この出自譚は、朝鮮の人々が隣国を貶める意識を持つて語つたと考えられる。

中國には古代から、異常出自譚の一種として王朝始祖譚が見られる。人間が神人、天女、光など人間を超えた存在と交接し、その結果誕生した子どもが王朝の開始者となる話である。この場合、異常な誕生をした子どもは聖性を持つ。ところが、その一方で、偉人を貶める話があり、その中で、偉人が異類の出自だとされることがある。偉人ではあるが、出世はしても異類の出自だから人間以下の存在であり、大したことはない、という具合に貶めるのである。

例えば、広く流傳する韓信出自譚がその一つである。この話は、異類の子どもが風水を得て出世するという、宋太祖出自譚と似たパターンを持つ。話は以下のようなものである。

韓家の娘は将棋が好きだったが、隣の娘にいつも負けていた。飼っているサル（馬猴子）に、勝たせてくれたら一緒に寝てあげると口約束する。その後韓の娘が隣の娘と将棋をさしていると、サルは横から合図を送つて娘を勝たせ、娘と通じる。娘は妊娠し、娘を追われる。子どもが生まれ、韓信と名付けられる。韓信が豚を飼っていると、山に風水師が現れ、王になれる風水の地点に卵を置き、柳の枝を挿して帰る。韓信はかわりにゆで卵を置き、柳の枯れ枝を挿す。風水師はもう一度別の方法で風水の良い地点かどうか試すが、また韓信にだまされ、見立てが外れたと思いこんで帰る。韓信は母親をここに生き埋めにし、後に「三七王」になる。しかし、母親を生き埋めにしたので寿命を二〇年削られ、三七歳で死ぬ。

（吉林省通化）⁽²⁾

韓信は漢の高祖時代の功臣、武将である。項羽を滅ぼす際に大功を立て、楚王に封ぜられたが、後に呂后に捕えられ、斬に処せられた。

上の出自譚は、明らかに異類の出自を理由に韓信を貶めている。たとえ異類の子が異常な出世をする話でも、古い伝統を持つ神聖な王朝始祖譚に属することは限らないのである。

中国では、民族を貶める時は、その民族が自分たち中国人の末裔だという言い方をすることがある。先祖がいなければ子孫は生まれない。だから先祖には絶対に頭が上がらない、という発想である。例えば、徐福伝説がそうである。中国では、日本人は秦朝の徐福の末裔だと広く信じられている。『史記』には秦朝の徐福が、始皇

帝の命で不老不死の薬をさがすため東海へこぎ出したという記述が見える。その後、徐福は帰国せず日本に住み着き、日本人の始祖になったたといふ。この伝説を知らぬ中国人はない。中国人が日本人に対してこの伝説を持ち出す時は、その底に日本人を貶める意識がある。中国人の対日感情は、日中戦争の後遺症で、良いとはいえない。そのことがこの傾向を強めているようだ。

前述の、朝鮮の咸鏡北道方面に伝わる清太祖出自譚は、こういう偉人を貶める話の系統に属するのであるまいか。

同じ咸鏡北道でも、異類の動物の種類や話の展開はさまざまである。例えば、咸鏡北道城津の広積寺廃墟の伝説では、寺の蜘蛛が尼僧に通じ、生まれた子どもが中国に行つて清朝を興したといふ。⁽¹³⁾また、咸鏡北道会寧郡永綏面鰐池岩洞に伝わる伝説では、吳家の娘にカワウソが通じて息子が生まれる。この子は、私塾に入つても仲間に人間の子ではないといじめられるので耐えられずに川向こうの、中国の漢城県に移り、風水師から皇帝の風水を奪つて後に天子になつたといふ。⁽¹⁴⁾

全体としてみると、清太祖出譚の特徴は、朝鮮の女性と異類の間に産まれた子が、隣国へ行つて皇帝になる点にある。清朝皇帝は異類の子であつて、しかも朝鮮民族の末裔だといふのだから、清朝を強く貶める意識がはたらいていると思われる。

この背景としては、清朝に対する朝鮮側の複雑な民族感情が挙げられるであろう。明清の王朝交代期に、太祖ヌルハチを継いだホンタイジは二度（一六二七、一六三六年から三七）にわたつて朝鮮に侵

入する。宮嶋博史によれば「一度にわたる女真＝清の侵攻とそれへの屈服は、朝鮮にとって大きな衝撃であった。（中略）女真是朝鮮族にとつてもっとも近い異民族であり、ながいあいだ支配と同化の対象であった。そしてオランケと呼んで夷狄視してきたのである。清への屈服は、従来のこうした関係を一八〇度転換させるものだった。夷狄である清に対し臣下の礼をとるという屈辱の中で、朝鮮こそが中華の正当な後継者であるとする『小中華』の考證が台頭しつづけるのは、きわめて自然なりゆきであった」という。

清太祖出自譚が朝鮮側だけに見られ、中国側に見られないのは、清太祖出自譚が朝鮮側だけに見られ、中国側に見られないのは、當時の朝鮮の『小中華』思想を背景に生まれた、中国を貶める意識を持つた出自譚であるからと思われる。

ところで、前述の、咸鏡北道城津にある広積寺廃墟の伝説は、上にあげた以外に諸説あり、子どもを産んだのは尼僧ではないともい。子どもを産んだのは寺の雌蜘蛛が変身した娘で、娘のもとへ通じたのは、寺の池の蛇だという。さらには、これは蛇ではなく、竜だともいう。竜は王権を表すから、この部分は聖的意味合いを持つ。⁽¹⁵⁾

また、咸鏡北道会寧郡永綏面鰐池岩洞でも、カワウソの子孫に關しては、諸説ある。中には、清太祖が産まれる時、家から赤紫色の雲が湧き出た、と付け加えられている話もある。これは、中国の伝統的な王朝始祖譚のパターンだから、この部分には聖性が認められる。⁽¹⁶⁾清太祖出自譚が生まれる条件が、明清交代期の、朝鮮の清に対する民族感情の複雑さにあるとすれば、時代が下り、清朝に対する

る感情が変化すれば、表現は変化してゆくはずである。清太祖出自譚に王朝始祖譚の聖性が表れるのは、語り手の側の清朝に対する意識のゆれが表れているのではないか。つまり、零落した、貶められた存在に、新たに聖性が付加するのである。

ところで、異類の子を貶める出自譚は、前後二つのタイプが結合した清太祖出自譚だけであろうか。朝鮮の「夜來者型」(「蛇婿入・

苧環型」に対応)の出自譚にも、同じ意識が無いのだろうか。

じつは、「夜來者型」の類話としては朝鮮で最も古い、甄萱出自譚にもその傾向がみられる。『三国遺事』によると、後百濟王朝の始祖甄萱はミニズの子であったという。甄萱という名前の音は、ハングルでミニズを表す音によく似ており、そのため、流傳していた夜來者譚に、甄萱が仮託されたのだという。⁽¹⁸⁾

この章のはじめに引用したが、大林太良はこの甄萱出自譚を伝統的な王朝始祖譚と位置つけ、三輪山神婚譚との関連に注目した。しかし、この甄萱出自譚も、清太祖出自譚と同じく、甄萱を貶める意味あいを持つのではないか。なぜなら、娘は糸を通した針を刺すが、糸をたどって行くと大きなミニズの「腹に針が刺さっていた(針刺於大蚯蚓之腰)」という。つまり、ミニズは人間に殺されてしまう。この結末は、中国の『宣室志』で、錐を刺されるネキリムシの話と同じである。この点から見て、甄萱出自譚のミニズは卑しめられた異類であって、神性を持つとは考えられない。

『三国遺事』の中で、甄萱はひどく評判の悪い人物であり、「甄萱は新羅の平民より起つて、新羅の官禄を食みながら禍心を抱き、

國の危機を幸いとして首都を侵して君臣を獸のごとく殺した。実に天下の元凶というべきである⁽¹⁹⁾などと罵られている。ちなみに、『三国遺事』の著者一然は新羅出身である。このような点から見て、甄萱出自譚は清太祖出自譚と同じような、人を貶める話の系統に属するのではないのだろうか。⁽²⁰⁾

4 結 び

この稿では、從来三輪山神婚譚の源流と考えられていた宋太祖出自譚を始めとする、中国、朝鮮の王朝始祖譚について考察した。

宋太祖出自譚では、風水によつて子孫が尊崇される地位に昇る。しかし、三輪山神婚譚では血筋そのものが尊崇される。両者の性質の違いから、宋太祖出自譚などの王朝始祖譚は三輪山神婚譚の直接の源流とすることはできない。

中国の異常出自譚には、伝統的な王朝始祖譚として子孫が聖性を有する系統と、逆に子孫を貶める系統がある。宋太祖出自譚と、その類話である朝鮮の清太祖出自譚は、この異常出自譚の中の、偉人を貶める系統に属する出自譚ではないかと考えられる。朝鮮で宋太祖が清太祖に入れ替わった時代は比較的新しく、時代背景から見て、明清交代期の民族の摩擦に端を発したと考えられる。

また、朝鮮の甄萱出自譚は、同じく偉人を貶める系統の出自譚である可能性がある。そうなると、甄萱出自譚も、三輪山神婚譚とは聖性の有無において異なると言わざるをえなくなる。

中国、朝鮮半島において、「蛇婿入・芋環型」が数多く伝承されていることを考えれば、確かに、日本におけるこのタイプの最古の類話である三輪山神婚譚も、朝鮮半島から伝播したと考えるのが自然であろう。

しかし、同じ「蛇婿入・芋環型」といつても、日本と朝鮮半島、大陸の伝承の質に決定的な違いが見られる以上、伝播のしかたについては、再考察が必要である。三輪山神婚譚では異類の血筋は聖性を持ち、畏怖と尊崇の対象となる。反対に、半島と大陸では、異類は貶められ、人間に殺されるほど弱々しい。海を隔てて、異類と人間の力関係は逆転するのである。この逆転はどこから生じるのか考える必要がある。

三輪山神婚譚の持つ聖性がどこから来たかを知るために、日本と中国の文化の差異に言及せねばならない。この問題については、改めて別稿でとりあげたいと思う。

5 注

- (1) 『日本昔話研究集成』「昔話の発生と伝播』(一九八四・名著出版版) 所収福田晃『総説昔話の発生と伝播』
(2) 『鍾敬文学術論著自選集』(一九九四・首都師範大学出版社) 所収「老嫗稚伝説的発生地——二箇分布於朝鮮、越南、及中国的同型伝説的発生地域試断」初出は『民族学研究』一卷二号
(3) 出石誠彦『支那神話伝説の研究』(一九四三初版・一九七三

増補改訂版・中央公論社) 所収「支那の帝王説話に関する一考察」

(4) 大林太良『東アジアの王権神話——日本・朝鮮・琉球』(一九八四・弘文堂) 第二〇章「三輪山伝説の原義と系統」

(5) 鍾敬文(2)論文に、この指摘が見える。鍾敬文は、前半が三輪山神婚譚に対応し、後半は「天子地型」が複合していると指摘した。ただし、鍾敬文のいう「天子地型」では、「1、カワウソと人間の女性が結婚して生まれた息子は泳ぎがうまい(2、3以下略)」というように、主人公が異類の子どもに特定されている。この部分は誤りで、このタイプの主人公は、基本的には人間でなくてはならない。また、宋太祖出自譚にはカワウソ以外の動物も現れるから、カワウソという動物に聖性を持たせるなど、特定の意味づけを行うことには意味が無い。

(6) 『太平廣記』卷四七三(一九八一・中華書局) 所収「施子然」。

(7) 『大三輪』九四号(一九九八・大神神社) 所収 大林太良「中国の芋環型説話」には、中国の古文献で、「蛇婿入・芋環型」に対応する類話が紹介されている。ただ、『宣室志』より古い類話は含まれていない。

(8) 鍾敬文(2)論文に、この指摘が見える。

(9) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』(一九七六・弘文堂) 本格昔話II 「三五三嫁に行った娘は他人」

(10) 『楊家将演義』は、宋朝に仕えた楊業一族の、三代にわたる忠勤の物語である。楊業一族の事跡は、すでに北宋朝から民間に流傳し、その後南宋の話本、金の院本、元の雜劇の題材にもなり、

明朝万暦年間（一六〇六年）には『楊家將演義』として小説化された。類話【22】では、冒頭に「どうして楊家將は趙家を守り続けたのか？」という一句があり、結末がこの疑問に答える形になっている。また、類話【14】には「趙家天子楊家將（趙家は皇帝、楊家は家臣）」というしゃれ言葉が見える。そのこころは

「換朝不換将（王朝が代わっても家臣は代わらず）」で、形勢が変わつても人事が変わらないという意味である。このしゃれ言葉は、楊家が、五代の後漢と宋朝の二代に臣下として仕えたという史実を踏まえている。

（11）①今西竜『朝鮮古史の研究』（一九三七・近沢書店）所収

〔朱蒙伝説及老獅稚伝説〕

②崔仁鶴『朝鮮伝説集』（一九七七・日本放送出版協会）異

常誕生の部

（12）『吉林省民間文学集成通化卷黃顯孚故事集』（一九九〇・通化市文学芸術連合会他）

（13）（11）①②

（14）（11）①②

（15）礪波護・武田幸男『隋唐帝国と古代朝鮮（世界の歴史6）』（一九九七・中央公論社）第2部14「下代新羅の大反乱」宮嶋博史

（16）（11）②所収の「三〇七広積寺のくも」

（17）（11）②所収の「三〇四老獅稚」

（18）一然著・金思輝訳『完訳三国遺事』（一九八〇・六興出版）
巻第一紀異「後百濟甄萱」1に、この指摘がある。

（19）（18）「後百濟甄萱」末尾、史論

（20）一九九七年一〇月アジア民間説話学会（梅花女子大学）発表「韓国蛇婿説話に現れる非常人物化の様相と意味」（姜在哲）でも、甄萱説話を否定的に捉えていた。

6 現代の昔話資料に見える類話

I、【1】から【13】：「蛇婿入・芋環型」に対応する中国の類話

II、【14】から【16】：「充分に生かされた風水型」の類話

III、【17】から【27】：「宋太祖出自譚（蛇婿入・芋環型）」+

「充分に生かされた風水型」の類話

I 「蛇婿入・芋環型」に対応する中国の類話（エーバーハルト

112 妖怪との情事」の一部分）

【1】娘が突然妊娠する。娘は、夜になると一人の書生が通つてくるが、夢の中のできだとと思っていたという。親は娘に糸を通した針を用意させ、服に刺すよういいつける。翌朝糸をたどると、糸は納屋の米を入れるカメの中の大きなゲジゲジ（蚰蜒）まで続いている。母親は熱した油をあびせかけて蚰蜒を殺し、油餅を焼いて娘を座らせると、娘の身体から蚰蜒の子がたくさん下りる。（黒竜江省鶏西）『鶏西民間故事集成』（一九八九）

【2】見知らぬ男が毎晩娘のもとへ通つてくる。娘がたずねると、蛇の精だと答える。娘は妊娠する。親が糸を通した針を用意させ、

男の服に刺すよういつける。翌朝その糸をたどると、糸が岩の隙間の蛇まで続いている。娘は死ぬ。娘の葬式の時雷が鳴り、蛇は雷に打たれて死ぬ。これは天罰だと皆は言う。娘の墓に無数の蛇が出る。これは娘の産んだ蛇の子だと言われる。(遼寧省大連)『昔話の再生——昔話研究と資料二二』(一九九四・三弥井書店)所収郭富光「中国遼寧省の異類婚姻譚・話型索引」

【3】縁遠い娘が庭のオンドリに愚痴を言う。すると美青年が毎晩娘のもとへ通つてくる。親が娘に、青年の服を隠すよういつける。翌朝、オンドリが裸になつてゐる。親がオンドリを殺すと、娘は首を吊つて自殺する。(遼寧省大連)『昔話の再生——昔話研究と資料二二』(一九九四・三弥井書店)所収郭富光「中国遼寧省の異類婚姻譚・話型索引」

【4】席長者の娘が、精神がもうろうとする病氣にかかる。母方の祖母が娘に聞くと、色白の書生が毎晩通つてくるという。祖母は娘に相手の名を聞くよういつける。男は、姓は蚰、名は蜒、家は陝西糟斗県と答える。祖母は赤い糸を通した針を、男の服に刺すよう言う。翌朝糸をたどると、糸は種蒔き機のハコ(糟斗)の中にいる大きな蚰蜒まで続いている。蚰蜒は種蒔き機ごと焼き殺される。(山西省曲沃)『曲沃民間文学三套集成』(一九八七)

【5】夜、娘のもとへ金色の服を着た若者が通つてくる。娘は瘦せてくる。母親は、娘に名前と家を聞き、服のボタンをもらうよういつける。男は、姓は蚰、名は蜒、水斗殻(水ます)に住んで三年と答える。翌朝見ると、ボタンは蚰蜒の足だった。そこで、軒の下に吊つた水ますを蚰蜒ごと焼き払う。(山西省靈久)『靈久民間故事』(後記日付一九九〇)

歌謡諺語集成』(一九八〇年代)

【6】娘が突然妊娠。父親が問い合わせると、夜、男が通つてくるといふ。父親が寝ずの番をするが、男を発見できない。家探しをすると、ふいごの後ろの穴に大きな蟬を発見。沸かした油を穴にそそぎ込んで蟬を退治する。(山西省応県)『応県民間故事諺語歌謡集成』

【7】趙家では、一人娘を結婚させたがらない。夜、娘のもとへ、緑色の服を着た書生が通つてくる。母親が若者の服を隠すよういつける。母親が残された服を焼くと、裏庭の灰菜(シロザ)の葉が無くなつてゐる。灰菜はやがて枯れる。娘は灰菜を掘り起こして夫として祀る。父母は娘を結婚させようと仲人を呼んでくるが、娘は祀つた灰菜が夫だと言いい、数ヶ月後、子どもを生む。(山東省臨朐県)『中国精怪故事』(一九九五・上海文芸出版社)

【8】商人が遠方へ商売に出かける。夜、妻のもとへ緑色の服を着た男が通つてくる。妻がどこから來るのか聞いても、隣に住んでいた男が通つてくる。妻がどこから來るのか聞いても、隣に住んでいた男が通つてくる。妻は糸を通した針を男の服に刺す。翌朝糸をたどると、根が人型になつてゐる。千年経た何首鳥は根が人型になり、こすと根が人型になつてゐる。千年経た何首鳥は根が人型になるとしか言わない。妻は糸を通した針を男の服に刺す。翌朝糸をたどると、庭の何首鳥(ツルドクダミ)の根に刺さつてゐる。掘り起食べると不老不死になるという。(江蘇省鎮江、丹陽)林蘭『三個願望』(一九三三・北新書局)

【9】小学生の男の子が、放課後に知らない女の子と遊ぶうち、生氣を無くす。母親が女の子の服に糸を通した針を刺す。翌朝糸をたどると、糸は道ばたの荒れ地の莧菜(ヒユ)まで続いてゐる。母親が切り倒すと血が出る。女の子は現れなくなる。男の子が、道を通

るたびに小便をかけたから、莧菜が精になつたのだという。（四川省重慶）『中国精怪故事』（一九九五・上海文芸出版社）

【10】孫魏鎮の山麓の人型をした石が、日月の精を受けて男に化けられるようになる。夜、娘のもとへ通う。娘は瘦せ衰える。母親が芒環を渡し、男の首に結びつけるよう言つ。翌日糸をたどると、石人の首まで続いている。石工に首を取らせると、血が出る。（浙江省余姚）林蘭『民間伝説下』（一九三〇・北新書局）

【11】葡萄農家。葡萄の木に、主人の血がつく。木が化けて悪さをするようになり、夜、娘のもとへ通つて血を吸う。娘、生氣を無くす。医者に邪氣があると指摘され、母親が問いつめると娘はわけを話す。母親は娘に雄黃酒を飲ませ、銀珠を身につけ、糸を通した銀針を男に付けるよう言う。翌朝糸をたどると、糸は裏庭の葡萄まで続いている。葡萄を切り倒すと、娘の病氣は直る。（湖南省双牌県）『中国精怪故事』（一九九五・上海文芸出版社）

【12】娘が月經を水田に流す。カエルが月經を食べて人に変身し、夜に娘のもとに通う。娘、妊娠する。家人が赤い糸を通した針を娘に渡し、服に刺すよいいつける。糸をたどると、カエルが発見される。カエルは殺されたようだ。子どもがどうなつたかは忘れた。

（四川省射洪県天仙鎮）話者は唐興芝（一九四三生・女・学歴小学三年）。千野は、一九九七年八月、北京で唐の娘の楊利慧からこの話を聞いた。楊利慧は北京師範大学助教授。専攻は民間文学。この話を、母親から聞いたという。唐興芝が四川でこの話を聞いたのは、彼女が十代の頃だという。

【13】二人の農夫が畑仕事をしていて、韓家の三女が村一番の美人

だと噂する。蒿草（ヨモギ）の精がそれを聞きつけ、夜、娘のもとへ通う。娘、生氣を無くす。道士や和尚も直せない。兄嫁が聞くと、娘は、相手はヨモギの匂いがするという。兄嫁は糸を通した針を男に付けるよう言う。翌日糸をたどると、ヨモギに針が刺さっている。

ヨモギを掘つて焼き捨てる、娘の病氣は直る。（地域不明）頌名他『鬼狐精怪伝記二』（一九八九・中国民間文芸出版社）

II 「充分に生かされた風水」の類話

【14】趙匡胤は子どもの頃、楊家の牛飼いだった。楊家の祖父が亡くなつたので風水師を呼んで墓地をさがさせた。風水師は、崖から突きだした竜形の岩に祖父の遺骨を葬るよう勧める。竜は年に一度、天中節の晩に口を開けるという。趙匡胤はこの話を盜み聞きし、先回りして自分の父の遺骨を竜の口に入れる。楊家は角に祖父の遺骨をかける。そのため、宋代は「趙家天子楊家將（趙家は皇帝、楊家は臣下）」となつた。（河南省開封）林蘭『朱元璋故事』（一九二九・北新書局）

【15】趙匡胤は泳ぎがうまかつた。風水師から川底の石牛の口に自分の包みを入れるよう頼まれる。趙匡胤は、かわりに自分の父の遺骨を入れる。母親のもとに鳥が飛んできて「趙家の皇帝は一億年」と鳴く。母親が「三百年でいいよ」と答えたので宋朝は三百年で終わつた。（湖南省湘鄉）林蘭『呆黃忠』（一九三一・北新書局）

【16】長者の家の牛飼いが、山の上で牛を飼つてゐる。南方人が来て、その山は風水が良いと言う。南方人は卵を地面に埋め、翌日孵化するはずと言う。牛飼いはゆで卵と取り替える。南方人は次に枯

れ枝を挿す。牛飼いは、翌日すでに芽を出していた枝を抜き、枯れ枝と取り替える。南方人は風水を見間違えたのだろうと思い、去る。

牛飼いは自分の先祖の墓を山に移し、長者の娘を嫁にもらつて都へ行き、状元に及第した。『満族三老人故事集』（一九八四・春風文芸出版社）

III 宋朝太祖趙匡胤出自譚の類話（「蛇婿入・苧環型」+「充分に生かされた風水」）

【17】後唐の時代、趙員外の娘が妊娠する。親が問いつめると、夜、

体中青黒い人が通つて来るという。娘に赤い糸を通した針を持たせ、襟に刺すよういいつけ。糸玉が動かなくなつたのすべく糸をたどつてゆくと、糸は別の員外の養魚池に入る。員外は養魚池の持ち主と話をつけ、池に大量の石灰を投げ込む。甲魚（スッポン）が浮いたので、これを殺して食べる。娘は骨を隠す。一家はその後山西省に引っ越す。娘は子どもを産み、趙霸と名付ける。泳ぎがうまく、背中が青黒かつたので仲間から鉄背竜趙霸と呼ばれる。農民の楊は瓜作りの名人だったが、南蛮子から川底の石竜が風水の良い地点だと教えられる。楊は趙霸に、楊家の遺骨を竜に食べさせるよう託す。趙霸は自分の父の遺骨を石竜に食べさせ、楊家の遺骨を角に掛ける。趙家の子孫は宋太祖趙匡胤となり、楊家の子孫は掛甲將軍となる。（吉林省前郭爾露斯）『吉林省民間文学集成前郭爾羅斯卷上』（二九八八）

【18】娘が河辺で洗濯をしていると、全身が黒い若者が現れ、娘と通じる。その後、若者は夜に通つてくる。母親は赤い糸を通した針を挿す。趙霸は自分の父の遺骨を石竜に食べさせると、糸は井戸に続く。井戸に石灰を入れると、亀が死んで浮かび上がる。亀は食われてしまう。娘は子どもを産み、その後親子で家を追い出される。趙霸という若者に拾われ、結婚する。子どもは玄郎と名付けられて、後に趙匡胤となる。（河北省保定）『保定的伝説』（一九八九・中国民間文学出版社）

を持たせ、若者の服に刺すよう言う。若者が帰つた後に糸をたどる

と、河の烏亀（カメ）に通じる。カメはスープにされる。娘は遺骨を隠す。娘は全身が黒い息子を産む。周囲からばかにされて、娘は息子と家を出る。息子は泳ぎがうまい。村の金持ちが死んで風水師に占わせると、風水の良いのは河底の神竜の角だという。息子は角に父の遺骨を掛け、後に黄帝になる。（吉林省白山）話者は紀炳信（六〇歳）。採集者は娘、紀凌雲。採録地点は吉林省白山市八道江区八道江鎮老營村。一九九四年採録。紀凌雲は北京師範大学中文系九六級学生。

【19】夜、趙員外の娘のもとに男が通い、娘は妊娠する。母親が糸を通した針を男に付けるよういう。翌朝糸をたどると、糸は裏庭の養魚池へ続く。石灰を池へ入れると、大きな忘八（カメ）が死んで浮かび上がる。娘は子どもを産み、子どもは趙巴子と名付けられる。趙巴子は泳ぎがうまく、河底の独角牛と遊ぶ。同村の楊家は、それが独角竜と気づき、楊家の遺骨を趙巴子に託して竜に食わせようとする。趙巴子は自分の父親の遺骨を竜に食わせる。趙巴子の孫から趙匡胤が出る。（遼寧省鞍山）『中国民間故事集成遼寧卷』（一九九四）

【20】夜、杜員外の娘のもとに書生が通い、娘は妊娠する。糸を通した針を服に付けさせると、糸は井戸に続く。井戸に石灰を入れると、亀が死んで浮かび上がる。亀は食われてしまう。娘は子どもを産み、その後親子で家を追い出される。趙霸という若者に拾われ、結婚する。子どもは玄郎と名付けられて、後に趙匡胤となる。（河

【21】趙家の娘が書堂の同級生と親しくなり、密かにつきあううち、妊娠する。伯父が見つけて、糸を男のボタンに結ばせる。糸は裏庭の湖に続く。石灰を入れると、何か大きな生き物が死んで浮かび上がる。娘は子どもを産む。子どもは泳ぎがうまく、湖底の独角竜と遊ぶ。風水師が遺骨を託して竜に食わせるよう頼むが、子どもは母親から自分の父親の遺骨をもらつてそれを竜に食わせ、託された遺骨は角に掛ける。風水師は太白金星。託されたのは楊家の遺骨だった。子どもは後に趙匡胤になるが、太白金星の命に背いたから在位が短かった。（山東省濰坊）『寒亭民間文学集成二』（一九八八）

【22】夜、趙家の娘に裏庭のカメ（王八）が通い、息子が生まれる。息子は匡胤と名付けられる。王八は突然死ぬ。冬、母親が病気になり、臨終に西瓜を食べたがるので、匡胤は太陽の方角に探しに行く。西瓜畑のお婆さんが、西瓜をあげるから楊家の先祖の遺骨を石竜に食わせてくれと言う。匡胤、自分の父親の遺骨を竜に食へさせ、託された遺骨は角に掛ける。匡胤は皇帝になり、楊家は臣下になる。（河南省淇県）『中国民間故事集成河南省淇县卷上』（一九八七）

【23】夜、趙家の娘のもとへ男が通い、娘は妊娠する。母親は、糸を通した針を男の襟に付けるよう言う。翌朝糸をたどると、糸は川砂に入っている。掘り返すとスッポン（鼈）がいる。スッポンは殺され、甲羅は娘の針箱になる。娘は子どもを産むが、外聞が悪いので母親でなく姉と呼ばせる。書堂の子どもたちに私生児といじめられ、父母の行方をたずねる。母親は事実をうち明け、針箱を渡す。後、子どもは風水の良い地点に父の甲羅を埋め、皇帝の趙匡胤になる。（湖北省武当山）『中国精怪故事』（一九九五・上海文芸出版

社）

【24】漁民の趙家。父母と娘で漁船に住んでいる。夜、娘のもとへ男が通ってきて、娘は妊娠する。母親は、糸を通した針を男の服に刺すよう言う。翌朝糸をたどると、糸は洲の上のカワウソ（水獺）へ続く。父親は、鉄の鍬でカワウソを撲殺する。娘は子どもを産み、趙小と名付ける。泳ぎがうまく、冬でも氷を割つて海に入り、魚を捕つて売る。ある時、代金を踏み倒そうとした男を殴り殺し、役所につれていかれる。役人に事情を聞かれ、海底の竜が熱氣を出しているので寒くないこと、竜のまわりに魚が多いことを説明すると、役人は、自分の先祖の遺骨を竜に食わせてくれよう託する。趙小は、自分の父親の遺骨を竜に食わせ、役人の先祖の遺骨は角に掛けているので寒くないこと、竜のまわりに魚が多いことを説明すると、趙小は趙匡胤となり、役人の家からは閻老（閻は角と同音）が出る。（江蘇省灌雲）林蘭『灰大王』（一九三三・北新書局）

【25】漁民の趙家。漁船に住む。カワウソ（水獺猫）が色白の書生に化け、夜に娘のもとへ通う。娘は妊娠する。夜、父親が船端で待ちかまえ、斧で仕留める。娘は子どもを産み、匡胤と名付ける。子どもは泳ぎがうまく、魚を捕つて売る。冬に楊家に売りにゆくと、夫人に呼ばれ、なぜ魚が捕れるのか聞かれる。水底に竜がいて口を開けており、その熱氣で寒くないこと、竜のまわりに魚が集まつていることを言うと、夫人から先祖の遺骨を竜に食わせるよう頼まれる。母親の助言で、自分の父親の骨を竜の口に入れ、託された遺骨は角に掛ける。趙匡胤は皇帝に、楊家の子孫は掛角將軍になる。（江蘇省灌雲）『中国民間文学三套集成故事集成灌雲縣卷』（一九八

【26】

漁民の趙家。漁船に住む。夜、男が娘のもとへ通い、娘は妊娠する。訳を聞いた両親は、待ちかまえて捕まえるとカワウソ（獺猫）だった。カワウソは殺され、食べられる。娘は子どもを産む。

子どももは泳ぎがうまい。冬に、一ヵ所だけ氷が張らない場所をみつける。そこには大きな鰐鱗がいて、後ろにたくさんの魚が従つている。捕つた魚を売りにゆくと、野人が奪いにきたので殺す。役所に連れて行かれ、役人の楊に訳を聞かれる。楊は鰐鱗が竜であることに気づき、先祖の遺骨をそこに置くよう子どもに頼む。子どもは母親の助言で、自分の父親の遺骨を竜に食わせ、楊家ののは鼈に掛ける。趙家からは趙匡胤が出るが、楊家は掛角将軍で終わる。（江蘇省如皋）『中国精怪故事』（一九九五・上海文芸出版社）

【27】

郷紳の庭のスッポン（鼈）が、修練して人に化けられるようになり、夜に郷紳の娘のもとに通う。娘、妊娠する。両親は糸を男の服に刺すよう言う。糸をたどると、池に入る。池の水を干すと、祖父の代に放したスッポンが現れたので、これを殺してばらばらにする。娘は子どもを産む。子どもは家でばかにされ、学問をさせてもらえない。当地の金持ちが風水師に占わせて、川底の泥竜を発見。泥竜に先祖の遺骨を食わせたいと考え、賞金を出して人を募る。子どもは、母の助言で、自分の父の遺骨を入れ、託された遺骨は角に掛ける。子どもは後に皇帝になり、金持ちの子孫は閣老になる。（江蘇省松江）林蘭『灰大王』（一九三三・北新書局）

（せんの・あすか／法政大学）